

目的：近年の消費生活の拡大化傾向は、交通不便な僻遠の地の住生活にも影響を及ぼしている。本研究は、未だ伝統的要素を多く残す僻地を調査対象として、伝統的な間取りや住様式の多様化の現状、居住者の住意識、生活歴、家庭経済の状況や、家族員の生活動向などと住宅型との関連を知り、住生活の変化を規定する要因を探ることを目的とした。

方法：鹿児島県薩摩郡上甑村江石地区を取り上げ、総戸数 130戸のうち、聴取り調査が可能な老人のいる世帯を中心に37戸の事例調査を行う。調査時期は 1988年 7月。

結果：住宅の間取りを基本にして型分けすると、3つに類別出来る。まず、在来型があるが、これは平家を基準とし、間取りには、田の字型の他に、敷地の形や、規模の関係で2室または3室しかない型もみられる。伝統的な高床の居室と、土間を板間化した一段低い台所で構成されるのが普通である。内便所化、内風呂付への改造、台所設備のステンレス既製品化、プロパン化は完全に終わっている。2番目の型は、在来型の改良型とみられるが、昭和50年前後から後に建てられたものでは、中廊下のあるものが目立つ。以上のふたつの型では、イスザを用いることは身体的故障などの例外的なケースであり、昔ながらのユカザ生活が行われている。最後に都市型ともいふべき新型があるが、これにはそれぞれの生活歴を反映した多様な住宅型が含まれる。二階家が増え、鉄筋コンクリート造もあり、食事のイスザ化も顕著である。都市生活で得た経済力の背景を無視することはできないが住居観や生活意識の変化がうかがわれる。〔この研究は、ベターホーム協会の研究助成金に基づいて行われた共同調査（代表者：鳴門教育大学・星野久）による。〕